

## 近松『国姓爺合戦』着想攷

松田 存

### はじめに

マンハッタン（ニューヨーク・ブロードウェイ）における『コーラスライン』には及ぶべくもないが、近松門左衛門（一六五三―一七二四）作・五段浄瑠璃『国姓爺合戦』は、足掛け三年越し十七カ月の長期興行を記録に遺す作品である。また国姓爺に関する史料・文献は極めて多く、その種類や範囲も内外に亘り、歴史上の人物としても最も大きな関心が寄せられた一人であろう。

そこで今少し、作品のモデルともなった国姓爺鄭成功の伝記にふれておこう。

成功の父は、日本甲螺かしらといわれた鄭芝龍（一六〇四―六一）で、福建省泉州南安県石井せきせいの出自、芝龍の父は紹祖といい泉州の庫吏であった。『石井本宗族譜』によると、鄭氏一世は隠石公で、芝龍はその十一世にあたる。芝龍の字は飛黄または飛虹・飛皇などと伝えられ、日本では一官・老一官として知られている。これは平戸一官・五島一官といった通称である。少年時代から才子肌で、抜群の体力と武芸を身につけていたという。十八歳のとき父をうしない、母方の伯父黄程をたよった。黄程は、倭寇のながれをくむ南海・中国・日本の三角貿易に従事していた人という。明朝の対外貿易は、祖訓として

「寸板も下海を許さず」という海禁の立場をかたくまもっていた。したがって、勘合貿易や倭寇の消長にしても、日中貿易の制限ないし禁止による不平不満が、その根本的な原因であった。一般には、豊臣秀吉（一五三六―九八）の大陸出兵―文禄・慶長の役（一五九二―九八）―を一転機として、二百数十年にわたったいわゆる倭寇の患害は、一応終止符が打たれたとされている。しかし、万暦（明の年号、一五七三―一六一九）以後も、倭寇的密貿易商人はあとをたたなかつたらしく、黄程もこうした密貿易商ないし武装商人団の一人であつたらしい。したがって芝龍の日本来航は、その歴史的背景を反映しつつ実現されたもので、一説には、履物を売つたり仕立屋をしたりしていたという。

倭寇の全盛時代、五島列島はかれらの巢窟でもあつた。名高い倭寇の巨魁王直らは、ここを根拠地とし、これら海寇のなかには薩摩王（島津氏）の弟といわれるものもあり、九州の諸大名や浪人のなかには、かれらと氣脈を通ずるものもすくなかつたらしい。こうした日明関係を想定すれば、伯父黄程が雇つた商船に便乗して日本貿易におもむくようになった芝龍が、日本滞在の期間に、日本女性と関係のできることは、けつして不自然とはいえないだろう。いま平戸にある喜相院が芝龍の旧宅である。

田川七左衛門については、よくわからないが、足輕ほどの身分であつたらしい。先祖は、北条の家臣田川八郎朝顕で、弘安の役（一二八一年の蒙古襲来）に功名をたてた家系ともいわれている。その七左衛門の娘が成功の母である。母は、平戸中野村河内のまつ（松本氏）という女性であるとか、あるいは翁屋の主人八兵衛の娘高子とかいう俗説がある一方、中国側では、田川氏のことを倭婦とか、翁氏とか記し、父七左衛門のことを翁翌皇としている。屋号翁屋は、中国の翁氏から付したものであろうか。田川氏を遊女ときめつけるのは極論で、治工翁氏の養女という説もある。

先の黄程と同じような密貿易団には、このほか漳州の顔思齊（振泉）や泉州の楊天生をはじめ洪陞（杲卿）・張弘・陳德・林福・李英・莊桂・楊経・李俊臣というような仲間が居り、いずれも腕におぼえのある猛者ぞろいであつたらしく、殺人逃亡者、大刀の使い手、拳法の妙手、重量拳五百斤の保持者といった連中である。それぞれ船主（船主）になつたり、ま

たその使役・主管・賓客・用心棒などをつとめて居り、鄭芝龍も平戸にいて、たびたび藩士の家をおとずれ、双刀の技を学んだという。かれらの首領株であつた顔思斉が、日本官府ないし豪商を襲撃しようとする計画を芝龍が諫めたとか、また芝龍が田川氏を離別しようとして、かえつて田川氏に諫められたとか、これに類するような伝聞も多い。

いずれにしても、田川氏が芝龍の子を宿したことは事実で、その夢に大きな赤龍が天降るのをみたといい、また出産の日には火焰が天に冲したという。この赤龍の夢や火光伝説は別としても、日本側の伝承では、田川氏が平戸千里ヶ浜で文具を拾っているとき俄かに産気づき、浜の巨石に依つて一男子を生んだという。それは、葉山高行（朝川善庵ではない）作の『千里浜鄭氏遺蹟碑』（和藤内の碑）が建つて居り、いまも史蹟として児誕石が保存されていることから知られよう。これが田川福松であり、鄭森である。森という名は、おそらく福松の松と関係があろう。（石原道博氏）

その国姓爺福松（一六二四～一六六二、中国名鄭森、後に賜姓改名して朱成功また鄭成）の伝記史実を記す寛文年中刊の『明清闘記』をもとに近松が、初世竹田出雲（一六九一～一七五六）と諮つて成立したのが正徳五年（一七一五）十一月、大坂・竹本座で初演を見た『国姓爺合戦』である。

『国姓爺合戦』成立の蔭には、錦文流の『国仙野手柄日記』（元禄十四年・一七〇一）をはじめ自作の『大織冠』『磔静胎内裙』『相模入道千疋犬』などの先行作品があり、それらの作品をもとにさまざまな趣向を凝らして創作されたスケールの大きな作品といえよう。

そこで本稿では、このスケールの大きい『国姓爺合戦』なる作品を、先行作品からの趣向を取り込んだとはいえ、かねてから関心を抱いていた謡曲（能）・狂言の面から、近松の着想について考察を試みようとするものである。

## 一、

『国姓爺合戦』は、概ね七行九十丁、七行百三丁本であるが、内題に『国姓爺合戦』とある十行六十四丁、十一行三十三

丁、十二行三十丁本などがあり、その構成は五段、角書に「父は唐土母は日本」とある点からも、先行の謡曲（能）・狂言を無視し得ないものがある。以下、『国姓爺合戦』の梗概を追いつながらの考察をすすめていこう。

初段Ⅱ酒食に耽つては国政を顧みない大明十七代の思宗烈皇帝の所へ、韃靼国の使者梅勒王がやって来て、皇帝の寵姫たる華清夫人を後に申し受けたいと申し出る。これは実は、懷妊中の夫人を捕らえ、大明国皇統の断絶を画策する韃靼の魂胆である。

倭臣李蹈天は忠義の臣を装い、自らの左眼を抉り取り、韃靼王に献上することで帝の危機を救うのだが、その実は韃靼に内通し国を売り渡そうとしているのである。

（思宗烈皇）帝は、妹の梅檀皇女を李蹈天に娶せようとするが承諾しない。その帝に忠臣呉三桂が、李蹈天と韃靼との間の陰謀を暴露して諫言しているところへ、突如として梅勒王が率いる韃靼軍が来襲する。呉三桂は僅かな手勢を率いて敵の猛攻を食い止めようとするが利あらず、ついには破れて、帝は李蹈天の手に掛かって首をはねられ、無残な最期を遂げてしまふ。

その後、妻柳歌君に皇女を委ねた呉三桂は、華清夫人を助け、即位の印綬を持って退く。しかし夫人は敵弾に倒れ、呉三桂は夫人の遺体から胎児を取り出して落ちて行く。そして深手を負った柳歌君は、皇女を船に乗せて沖へ出す。

二段目Ⅱ舞台は平戸の浜である。和藤内と小睦夫婦が貝を拾っている。かつて帝に諫言して追放された明の忠臣・鄭芝龍は、日本に渡つて老一官と名乗り、浦人と契つて一子・和藤内をもうけているのである。そこへ皇女を乗せた舟が流れ着き、大明の危機を知った和藤内と老一官夫婦は、小睦に皇女を預け、韃靼と戦うために渡明する。

老一官には明に残してきた娘（錦祥女）がおり、今は獅子が城主・五常軍甘輝の妻となっている。その縁を利用して甘輝を味方にするため老一官は出立し、和藤内は母を連れ、千里が竹の虎を威服して後を追うのである。

どうやらこのあたり謡曲（能）「唐船」を想起させずにはいられない。その冒頭部分を掲げてみよう。

ワキ「かやうに候ふ者は、九州箱崎の何某にて候、さても一年唐土と日本の船の争あつて日本の船をば唐土にとどめ、唐土の船をば日本にとどめ置きて候、某も船を一艘とどめ置きて候、その船に祖慶官人と申す者を留め置きて候ふが、早十三回に成り候、某は牛馬をあまた持ちて候ふ程に、彼の祖慶官人に申しつけ野飼をさせ候、今日も申し付けばやと存じ候

と。そこへ、そんし・そいうという兄弟が唐土船にて父「官人恋しさに、いまだ存生にて、箱崎殿に召し使はれ候ふ程に、数の宝に代へ連れて帰国仕るべき為に、」波路遥かやつて来るのである。

官人はもともと唐土明州の津で「牛馬をあつかひ草刈笛の、高麗唐土をば名にのみ聞きて過ぎし身」であつたが、日本で「年月を送る程に二人の子を持」っているのである。箱崎の領主は、唐土から二人の子供が迎えにやってきたため、「祖慶官人の事は力なき事」としてこれを赦すのであるが、日本での「この幼き者どもは、此の所にて生まれ相続の者にて候ふ程に、いつまでも某召し使はうずるにてある」とすることから「船にも乗るまじ留まるまじと、巖にあがりて十念し既に憂き身を投げんとす」る。箱崎某は、「物のあはれを知らざるは、唯木石に異ならず、殊更出船の障りなれば、はや／＼暇とらするぞ、とく／＼帰国を急ぐべし」と日本子の同伴をも赦すのである。そして官人は唐子二人日本子二人を伴い、船上で喜びの舞楽を奏でながら帰国するというのである。唐事の代表的な曲（能）であるが、年代の異なる唐子二人日本子二人の計四人の子方を揃えなければ上演できないため、上演頻度はきわめて低いといえる。

五流（観世・宝生・金春・金剛・喜多）現行の謡曲（能）「唐船」は、『能本作者註文』に不明とし、『二百十番謡目録』には外山又五郎吉広作、『自家伝抄』に外山「そけいくわんにん」とみえる。外山又五郎吉広なる作者についての伝記は全

く不明であるが、大和猿楽四座の一つ外山（現宝生）座の楽師であつたものと推定される。

そして今、『国姓爺』成立以前の「唐船」の上演記録（能勢朝次『能楽源流考』演能曲目資料）をみると、計八回の記録がみられる。次に掲げてみよう。

○天文八年（一五三九）三月三日、室町邸猿楽Ⅱ呉羽・夕顔・唐船・誓願寺・松虫・猩々。（蜷川親俊日記）

○同九年（一五四〇）正月二日、石山本願寺年頭坊主能Ⅱ翁・誓願寺・揚貴妃・唐船。（證如上人日記）

○同十五年（一五四六）六月九日、大坂六町幼童ノ生玉遷宮能Ⅱ翁・寢覚・愛寿・舟弁慶・皇帝・羽衣・紅葉狩・松虫・

芦刈・西行桜・岩船・唐船。（證如上人日記）

○同廿三年（一五五四）三月十日、禁裏・手猿楽野尻等演能Ⅱ白髭・熊手判官・遊屋・唐船・橋弁慶・紅葉狩・満仲・二人静・道成寺・藤栄・羽衣。（言継卿記）

○永禄六年（一五六三）三月十三日、禁裏御乳人申沙汰手猿楽Ⅱ唐船・実盛・熊野・三輪・自然居士・百萬・江口入端・

高砂入端。（同右）

○天正二年（一五七四）四月四日、明神前にての演能Ⅱ白楽天・経政・江口・舍利・松風・唐船・杜若・紅葉狩。（伊達

家古文書所収輝宗日記）

○同七月十四日、勸進演能Ⅱ志賀・通盛・江口・唐船・安宅・杜若・大会（同右）

○文禄四年（一五九五）五月廿一日、下間法印を召し太閤演能Ⅱ金札太閤・唐船同・黒塚関白・井筒太閤・半部夕顔加賀筑前・皇

帝太閤（能之留帳）

である。太閤（豊臣秀吉）自身が「唐船」を舞っていることも注目に値し、謡曲（能）「唐船」がかなり人口に膾炙されていたことが知られる。文禄四年といえ、近松の生年をさかのぼること半世紀のことである。

二、

「国姓爺合戦」第三段に、

色 「声を上げ。

詞 「粗忽の申し事ながら。御身の父は大明の鄭芝竜。母は当座に空しくなり父は逆鱗被り。日本へ身退く其の時は二歳にて。

地色 「親子名残の憂き別れ弁へなくとも乳母が噂。物語にも聞きつらん我こそ父の鄭芝竜。日本肥前の国平戸の浦に年を経て。今の名は

色 「老一官。

詞 「日本で儲けし弟は此の男。これなる今の母。密に語り頼みたき事あつて。成果てし此の姿恥を包まず来たりしぞ。門を開かせたべかし

とあり、また、

色 「小声になり。

詞 「なう我々此の度唐土へ渡りし事娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬肥前の国松浦が磯といふ所へ。大明の帝の御妹梅檀皇女小船に召され吹流され。御代を韃靼に奪はれし御物語聞くとひとしく。父は素より明朝の廢臣。我が子の和藤内と申す者賤しき海士の手業ながら。唐土日本の軍書を学び。韃靼大王を滅し昔の御代に翻し。姫宮を帝位に即けんと先づ日本に残し置き。親子三人此の唐土へは来たれども。

と綴られている。中国と九州（日本）という異国を舞台とする物語にはかならない。そして『国姓爺合戦』は、錦祥女が形見の姿絵によって老一官を実の父と確認できるものの、韃靼王の掟によって日本からはるばるやってきた三人（老一官夫婦・和藤内）を城内に入れることができないⅡ三段目に移ることとなる。いわば序破急の破であり、クライマックスである。老一官の妻は、虜囚の恥を忍んで城内へ入り、その意を伝えるべく縛につくのである。

錦祥女は、願いが叶えば白粉を溶いて黄河に注ぐ泉水に流し、叶わなければ紅を溶いて流すことを合図として母（義母）を中に入れてかずく。そこへ、和藤内を討つため韃靼王から散騎將軍に任じられた甘輝が帰り、明を救うために味方になって欲しいという母の頼みを快諾するが、妻（夫人）の縁に引かれて味方になったと言われては末代までの恥辱になるとして、錦祥女の殺害に及ぶ。

義理の娘を見殺しにしたとなれば日本の恥であり、殺すなら自分を殺せと母は願い、甘輝は和藤内と敵対することになる。そして錦祥女は願いの叶わぬ印に紅を流し、その流れを見た和藤内は城に帰り、母の縛を解いて甘輝に迫る。

甘輝と和藤内が争う二人の間に入った錦祥女は、鮮血に濡れた胸元を開く。合図の紅の流れは実は錦祥女の血であり、彼女は自らの命を絶つたのである。甘輝は錦祥女の意を汲んで味方となり、和藤内に「延平王国姓爺鄭成功」の名を贈るのである。母もまた錦祥女の懐剣で自害して果てる。

四段目は急の場である。小睦は梅檀皇女を連れて明に渡る。呉三桂は山に隠れて太子を育てて九仙山に登り、五年の歳月が流れる。和藤内は連戦連勝、老一官は皇女と小睦を連れて九仙山へ登って来る。そこへ梅勒王の軍勢が皇女を追って押し寄せてくるが、呉三桂と組んでこれを撃退する。

五段目Ⅱ印綬を受けて即位した太子は永曆皇帝となる。

和藤内たちは南京城を攻撃して韃靼王を捕虜とし、李蹈天を処刑して天下が治まり、幕となる。



以上が『国姓爺合戦』の概要であるが、全五段の構成が実に均整がとれている。中でも眼目ともいうべき二、三段目は、謡曲「唐船」を想起させずにはおかない。

### 三、

その他、近松が浄瑠璃作品に採り込んでいる謡曲は計八十五曲に上り、唐事は「白楽天・楊貴妃・張良・邯鄲」の数曲で、台本の作成はいうまでもなく、謡曲は、近松の「構想及び趣向・素材等においても重要な要素」であり、謡曲「唐船」こそ、角書に「父は唐土母は日本」とある『国姓爺合戦』の着想に連繋するものと考えられる。

次に先ず、『国姓爺合戦』に採り込まれた謡曲（能）の文言を掲げる。（一）内は謡曲（能）名と作者・分類。

○文治の昔武蔵坊弁慶が、安宅の関守嘆きし例を引くや梓弓（小次郎信光作四番目物「安宅」）

○夫つらつらおもんみれば、韃靼逆徒の秋の月は、……帰命稽首敬つて白す。（同前）

○りんきやうのはうじが末葉諸国を勧進す（同前「勧進帳」の改作）

○上段下段の太刀捌き、陽炎・稲妻・獅子奮迅（作者不詳切能物「熊坂」）

○故郷へ帰る唐錦（世阿弥作修羅物「実盛」）

○纜に取り付きて、言ひ残せし事のあり、暫くのうと引止むる、エエ聞き分けなしと引切つて、船を深みに漕ぎ出せば、詮方波に身を浸し、只手を上げて、船よのう船よと、呼べど出船の（作者不詳四番目物「俊寛」）

○一粒の花の種は地中に朽ちず、終に千林の梢に上る（世阿弥作四番目物「蟬丸」）

（後日）かけども尽きぬ松の葉（世阿弥作協能物「高砂」）

○住吉に立帰り帰朝を待ち申さんと、夕波の汀なる蟹の小舟を漕ぎ戻し、追風に任せつつ沖の方に出でにけりや、沖の方へぞ（同前）

○また水中の遊魚は釣針と疑へり、雲上の飛鳥は弓の影とも驚けり、一輪も下らず萬水とても昇らねば（世阿弥作切能物「融」）

○虎嘯けば風起る（世阿弥作協能物「難波」）

（後日）竜吟ずれば雲起り、虎嘯けば風騒ぐ（同前）

○苔衣着たる巖はさもなく、衣着ぬ山の帯をするかな（世阿弥作協能物「白楽天」）

○青苔衣を負ひて巖の肩にかゝり、白雲帯に似て山の腰をめぐる（同前）

○花を踏んで同じく惜しむ色もあり（世阿弥作三番目物「二人静」）

○伝へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ会稽山に籠り居て種々の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや（小

次郎信光作四番目物「船弁慶」）

○関吹き越ゆる秋の風（世阿弥改作三番目物「松風」）

○門の戸さつと押開き伴う母は生死の境、菩提門を引かへてこれはうき世の無明門（小次郎信光作切能物「紅葉狩」）

○草木の雨露の恵みに長ずる如く（作者不詳三番目物「熊野」）

○姫君下知して宣はく、柳渦巻く木蔭には風ありと知るべし、弱き枝には蒼をもたせ、強きに花を開かせよ、うつろふ枝を楮<sup>すはえ</sup>にかへて、互に力を合はすべし（世阿弥作修羅物「頼政」）

以上、近松が『国姓爺合戦』に採り込んだ文言の謡曲（能）は十五曲に上る。

#### 四、

近松『国姓爺合戦』の成立に於いて、前掲「唐船」以外の唐事謡曲（能）が関与していることも否定できない。中でも九州を舞台とする「白楽天」などは興味深い。『能本作者註文』『二百十番謡目録』ともに世阿弥作とする協能物（真ノ序之舞

物)で、『紵河原勸進猿樂記』に寛正五年(一二四一)四月十日演能の記録が見える。その梗概を掲げておこう。

唐土の白楽天(ワキ白居易七七二―八四六)が唐の太子の宣旨に任せ、日本の智恵のほどを計ろうと海路に赴き、肥前ノ国松浦潟で小舟を浮かべる漁翁(シテ)に会う。漁翁が和歌を能くし、自分の詠じた詩を直ぐさま三十一文字に作り為したのに感心した白楽天は、更に、日本では鳥類畜類に至るまで生あるもの総てが和歌を詠むと聞いて驚嘆する。次いで漁翁は海青楽を奏して見せようといつて消え失せる。――中入――

やがて住吉明神(後シテ)が現われて海青楽(真ノ序之舞)を舞い、「八大竜王は、八りんの曲を奏し、空海に翔りつゝ、」神風を起して白楽天の乗った唐船を吹き戻し、神と君の守る御代を頌えるのである。いわゆる鎖国・排他思想の先行をなす曲であろう。

その後『国姓爺合戦』は、浄瑠璃に歌舞伎に、その内容も和事(世話物)、荒事(時代物)とりどりの趣向を凝らして大当たりをとることになるが、これを踏まえて紀海音(一六六三―一七四二)が享保二年(一二七二)に「傾城国姓爺」を、近松も同七年(一二七二)には「唐船今国姓爺」をそれぞれ執筆、「国姓爺後日合戦」としたが、前作『国姓爺合戦』を超えるものではなかった。なお浮世草子にも類似作品「国姓爺御前軍談」五卷(五冊)を生み、宝暦六年(一七五六)には謡曲の新作「和藤内」?が成立するという。いわば謡曲に想を得たと考えられる『国姓爺合戦』が新作の謡曲を生むというのである。

現行観世流謡曲乱曲に「和国」という曲がランクされている。次に掲げておこう。

さればにや畜類も、歌を詠ずる例あり、浜の真砂を歩み行く、蛙乃道の跡見れば、住吉の、海士乃海松藻にあらねども、仮にぞ人に、また訪はれぬると、水に棲める蛙まで、和国の風俗神の御代より始まれり。

さればにや唐土に、詩を作る諸人ハ三界をながむるに、花鳥風月、松風の私語、鼓ハ波乃音笛ハ龍の吟を以つて、舞楽をも作れり、たゞ人ハ、乱舞歌道に交はりて、心を延ぶるこそ万年の齢なりけれ。

この乱曲「和国」は、その曲趣において、先の「白楽天」を想起させる。

また文久三年（一八六三）には、河竹黙阿弥の「三題咄高座新作」、明治五年（一八七二）の「国姓爺姿写真絵」があり、昭和三年（一九二八）には小山内薫改作の「国姓爺合戦」が築地小劇場で上演された。『国姓爺合戦』の上演ブームは、近世から明治・大正・昭和へと、近代にも及んだのである。

小山内の「国姓爺合戦」は、いわば近松の現代語訳で、和藤内と小睦の對話に、原作とは異なる味を出しているとされている。

## 五、

また五段（浄瑠璃）という構成は、世阿弥（二三六三—一四四三）の能楽論書『三道』（別称『能作書』 応永三十年—一四二三—二月六日）から想を得たものであろうか。

同一、能作書条々二項に、

作とは、種をば、かやうにもとめ得て、さてなす所を定むべし。先づ、序破急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり。開口人出でて、さし声より、次第、一謡まで一段。自是破。さて、為手の出で、一声より一謡まで一段。其後、開口人と問答ありて、同音一うたひ、一段。其後又、曲舞にてもあれ、只謡ひにてもあれ、一音曲一段。自是急。其後、舞にても、働きにても、あるひは、はや曲、切拍子などにて一段。己上五段也。

とある。もともと序破急は三段として、雅楽の緩急を律する原理であったが、中世に至っては猿楽や連歌などでも重用されるようになったもので、世阿弥自身、先行の『風姿花伝』（応永七年—一四〇〇—卯月十三日）第三問答条々二項において、問。能に、序破急をば何とか定むべきや。

答。これ、やすき定めなり。一切の事に序破急あれば、申楽もこれ同じ。能の風情をもて定むべし。

と。同花伝第六花修云でも、

一、能の本を書く事、この道の命なり。極めたる才学の力なけれども、たゞ、巧みによりて、よき能にはなるものなり。

大方の風体、序破急の段に見えたり。

としている。そして、先に掲げた「序破急に五段あり」と理論づけたのは、おそらく世阿弥であつたろう。中世の謡曲（能）から近松の浄瑠璃作品に採り込まれている詞章と同様に、世阿弥のいう序破急五段の理論を拡大敷衍して近松の五段浄瑠璃の構想が成立して行つたものと考えられようか。

#### 参考文献

- 『名作歌舞伎全集』第一巻（東京創元社）
- 『観世流大成版』謡曲全集（檜書店）
- 上田萬年・樋口慶千代共撰『近松語彙』（富山房）
- 拙著『能―現行謡曲解題（全）―』（錦正社）
- 古典文学大系『歌論集能楽論集』（岩波書店）
- 石原道博著『国姓爺』（吉川弘文館）